

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和元(2019)年
9月号
通巻589号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和元年9月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷 監修
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



拝殿前の「相互而敬愛」碑、昭和丁卯歳（昭和62/1987年）日聖(花押)

中島 健さん撮影

昭和40(1965)年8月23日 月次祭法話より

これからは外に向かって進む

法主 矢追日聖（満53歳）

日本の国と大倭の二十年

今月は台風十七号の報道が随分早かったので、近畿地方もやきもきしましたが、関東の方はえらい迷惑で少し荒れたらしいです。(※近畿に向けて北上していたこの台風は、熊野灘沖で突然進路をほぼ直角に変え関東南部に上陸した。)

霊界の様子を見ますと、今年はどうもこの台風のような、我々人間が喜べない、苦しんだり騒いだり驚いたりということが、かなり起こるんじゃないかと思うんです。

八月は大倭に何かしら縁のある月でございまして、普段から一度整理したいと思っておったことをまとめて、今月の『大倭新聞』に大倭の二十年の流れというものを書いておいたんです。近いうちに皆さんがたの手元に届くでしょう。

「終戦」と言いつかつこいですが、日本が負けた敗戦です。それから丸二十年、大倭教の歳も二十年。日本の国の歩みと大倭の歩みというものが一体の形になって、今日まで流れて来ているんです。その終戦の日いろいろな神秘的な霊示というか神様からのお示しが大倭神宮であったことは、前の新聞にも書いております。

霊示とか御託宣ごたくせんというものは、私は母からちよいちよい聞くことがありましてね。私の母親というのは霊視・霊聴とかそうした方面においては、もう世界一だと思ふような霊能者なんです。またその

先代、私から言えばお祖母さんも、ちょっと世にも珍しい靈感者なんで、私で三代目になるんです。私の家はそういうような気遣いばかり産まれるんです。

私の母は女の子のことでし宗教的経験とか、そりや我々とはずいぶん違ったところがあるんで、私が母から聞く場合には、ある程度自分の経験とか知識で解釈するんです。

昭和二年の靈示

国が戦に負けた時には、靈界の神様というものは、次の建設の仕事がされておるはずですから、そんな時に靈示があっても不思議ではないと思うんですが、丁度私の数え年の十七歳、今流に言えば十五歳の昭和二年春、母にはなくて私に直に来た靈示には驚いたんです。

おそらく、その内容がちよっと狂ってるんで私にあつたと思うんですね。前の『大倭新聞』の中には書いておかなかつたんですけれども、今月の新聞に書いておきました。

それは、「これから二十年先になると、天皇は地に落ちる。社会に光がなくなつて、天災とか地震のようなものが次々と起こつて来る。そういう世相になつた時が、初めてお前が立つべき時なんだ。これは太加天腹において、神議りに議つた上で、その使命を持つたお前をこの世に生まれさせたんだ」ということなんです。戦争が起るとか負けるとかではなかった。

その時の日本は国力が充実して、アジアでは先進国だし一番の実力者でもあつたんです。だから人間的な常識だの認識とかで解釈する私は物凄く苦しんだんです。「一体これは何事か」と異様な感じを受けたんですよ。いわゆる左翼的な思想が

はびこつてきて、天皇が下に落ちて皇族がなくなつてしまつて、日本は共和国みたいになるのかもしれない、とかね。

その当時の私は、靈示とかそんなものは糞くらえでね、信じてませんよ。けど事実、自分に出て来るんだから否定も出来ないんですよ。だから私の青春時代はそういうような悩みで、世間の人の若い頃とはもう全然世界が違つちやたんですよ。

このことは親にも友達にも言うたことありません。それがもし官庁関係にでも聞かえたら、皇室不敬罪でえらいことになるんですよ。まあ年寄りには知つてますけど、戦後派の人にはわからんですよ。「天皇陛下がションベンいた」と言つても、「コラッ」と巡査が引つ張つて行くんですからね。天皇というのは、絶対的現人神ですから、人間の感覚で天皇を論じることなど考えられない時代です。「天皇が地に落ちる」なんて、もう口がちぎれても言えなかつたんです。

日蓮への出会い

それで、そのような靈示があつた後に出て来たのが日蓮だつたんですよ。私の家はその当時も今も日蓮宗で、うちの親も信仰しておつたんですね。私自身は、納得できない場合はなかなか納得しない性質なんですけれども、親には理屈抜きは無条件で付いていつたんです。ところが私自身に靈界から日蓮が出て来たので、自分の気持ちにおいては意外なことでした。それが日蓮との初めての出会いでした。

その日蓮曰く、「今さっきの御信託、御神示というものは絶対狂いが無い、間違いないから素直に受け取れ」と言つて、それを証明するんですね。そう言われたつて私は素直に受け取れない。そ

の当時、私は大阪布施の私立日新商業へ行つてましたから、あと五年で卒業さえすれば実業界に入つて、何か起業したり会社でもこしらえたり出来るんですよ。というのも親がもう家を貧乏にしてしまいましたが、何とかして昔の家に戻すことが、先祖さんに対するひとつの恩返しだというような、世間並みの考えを持つておつたんです。

ところが「お前は、宗教的な学問とか、あるいはまた行を体験するとか、そういうようなものを積み重ねなければいけない」、学・行の二道を励めという意味のことを日蓮に言われたんです。

大学入学

私は別に信じない代わりに疑いもしなかつたけれども、そういうように靈界からくどくど言われるから、「一応自分がその道にいっぺん行つてみなければ否定もできないんだ」と、言い替へたら日蓮の顔を立てましてね、東京へ勉強強しに行くことに腹を決めたんです。

学校はどこでもよかつたけど、日蓮宗が建てている立正大学の予科へ行つたんです。昔の中等学校は五年で卒業ですが、一年儲かると思つてね、四年修了で行きました。

学校には入りましたけど、靈界の人たちは別に「宗教の勉強せえ」と誰も言つてはくれぬ。宗教の学校ですからやつぱり哲学、仏教、宗教とか日蓮学というような必修科目があるんですけれども、その時間になつたらとにかく眠とうて眠とうて先生の講義は聞かれないんです。

取った程度なんです。

そこへまた語学はものすごく不得手で、忘れることといったら人一倍なんです。言葉とか語学というのは理屈抜きで覚えなきゃいけない学問ですから、ただもう単位取ったらいっていいんでね、友達に山をかけてもらって試験の前の日にそれだけ何とか覚えたという程度で、まあ卒業は出来たんです。

それで、学校で何をやっておったかと言うたら、山の中あちこち歩いたり土の中ほじくり回したりして昔の古いもの掘り出して、それを通して勉強するという考古学です。六年間それをやっておっただけなんです。だから宗教の学校へ行ったのに、宗教の勉強は何一つしなかった。また出来なかった。

必修科目の仏教の本とかは買ってあるんですけども、さてその本を広げて読もうと思ったら、目の奥から針射すようにチクチクして、ものの二ページ読めないんです。読ましてくれないんですね。今でも私の本箱に入ってますけれども、みな手垢も付いてないきれいなもんです。考古学の本なら徹夜しても読めるんですけど。

まあそういうような神秘的なこともあったもんですから、私自身には知識から宗教というものをとらえる必要がなかったんだと思います。

敗戦の日の霊示

そういうような過去があったものですから、敗戦のその日に神宮に参った時に、「今日から今度本当の宗教、大倭教として立て」と言われたかたね、私は「ごもっともだ」と思って素直に聞けたわけです。その当時、私も人間的に、「いよいよ戦争に負けて、天皇は最高責任者として国民に

代わって死刑になるかもわからない」というようなことも、考えたくらいです。だから、昭和二年の時に言われたその世相がね、その敗戦の時にびったり自分の気持ちに来て、初めて謎が解けたわけなんです。

昭和二年から約二十年先と言われたら数字でいけば昭和二十二年、昭和二十年だとまだ十八年ですけれど、大体霊界の霊示というのは、数学的にきっちりいくものじゃなくて、「その頃」というような示し方なんです。

もちろん日本人ですから、負けたという悲しき悔しさもありますけれども、腹の中の塊りがスーッと溶けてしまうように、それまで非常に悩んでおったことが解決してしまっただけであつたんです。

それで、「戦争に負けて日本の将来はどうなるんか」というような心配は、私には毛頭なかった。霊界は二十年先のことを見通して前もって示されておるんだし、「やっぱり日本は神国だ、間違いないんだ」と非常に安心感を持ってね、霊界から言われて来るものを素直に信じる気持ちになつたんです。

「霊界の言われる通り素直に動くのが賢明な生き方である。自分は一生宗教で以って立つべき宿命の人間であるんだ」という自覚を、私は八月十五日にはつきり腹の底からつかんだわけなんです。いわば人間が丸くなったんですね。

しかしその時にですよ、「大倭の宗教としての本質的な仕事というものは、これからまだ二十年先だ」と言われたんです。それが今年に当たっているんです。先月の月次祭や昨晚の教修会（※毎月紫陽花邑の寄り合い。月次祭前夜に行われていた）の時でも少し話した通り、人間根性として私はずくりしたんですよ。「まだ二十年も先か。

そうすりや俺は今三十五なんだから五十五になるんか（※数え年らしい）」とね。

その反面、「けどまあしょうがない。これは絶対間違いないんだから、俺が五十五になつたってやっていけるわい」と自信も持てたんです。私の過去の約四十年が、そういう霊示に基づいた働きによって、今日まで到達できたんです。「今年から何をしよう、来年からどないしよう」というような計画は毛頭なかったんです。これから先の仕事も、いわゆる神のまにまに流れて行くというのが私の行き方なんです。

天皇が人間宣言されたのが確か昭和二十一年の元旦だったと思います。それまで九重の雲の上にまします「スメラミコト」だとみんな思っておつたんですけれども、それによって完全に天皇は公に地に落ちた形になるんですね。

「この山（※現在の大本宮）を大倭の宗教の拠点としてやれ」と言われて、翌二十二年の十月三十日にこの土地に移って来ました。昭和二年に約二十年後とおっしゃった、その年なんです。その頃天災もあり地震もあり、いろいろな災いが続出しておつたんです。今でもありますけど。だから昭和二年におつしやつた世相というものが、ぴたり合っていたんですね。

これからは外向きに

その基礎作りの役目が今年の八月までであったと思うんです。だからして宗教活動そのもの、大倭の基礎、いわゆる城造りですから、すべて内向き姿勢だったんですね。内側向きのような形において生産事業も持ち、あるいは内部の整備をやつて来た今日までの二十年間です。

これは余談になるんですけども、最初の出発

には社会大衆の中に割り込んで街頭布教、あるいはまた救済事業をさせられた。私自身も富雄村民生委員として、いわゆるボーダーライン層、社会の底辺における人達の生活の中に自分自身が入り込んで実態調査から始まって、その人たちの生活改善とか、生活保護法による生活の保護とか。あるいはまた贅沢な奴はそれを取り消すとか足元の浄化運動ですね、そんなこともやらされました。また、個人家庭を巡った経験もあればね、病氣直しの拝み屋の出来損ないみたいなこともやらされました。あるいはまた心靈実験のような形で、霊媒を通した生活相談というものもやらされましたね。グループ対象に外部にも行っておりました。

宗教としてやっていく上において必要とする一応のことは全部やらされてきた。言い換えれば、浅うですけれども、いろいろな種類のことを人間としてずっと修得させられるという、私個人の人造りだったんですよ。

それはもう大体今年で卒業したと思うんです。過去のそうした全てのものを基礎として、これからの大倭というものは外向きの姿勢に変わって進んで行かなければいけない。

だからこの二十年間、私は信者に対してケツかましている形ですから、世間の宗教みたいに信者を親切に扱うということもなかったんです。「来る者は来たらしめ、来ない者は来なくてええ」と。これもやはり霊界の動きに基づいて、そういうような方法で今日まで参ったんですけども、今月の十五日から向こうというものは、いわゆる「一言向け矢放す」という時に当たっている。それはいつぱんに切り替え出来るというもんじゃなしに、ポツポツと丁度夜が明けて来るように、一年くらいの間に変化すると思う。

今まで土曜日と日曜日に私が出来るだけ家におるといのは、信者の人に公約してあるんですけども、それは昭和四十年を期して解消してもらうことになっているんです。覚えておる人は恐らくおりませんけれども。

毎月十五日は神宮へ参りますし、あるいは二十三日の月次祭、それに時々ある特別なお祭りの場合にはここにおりますけれども、これから私は土曜であろうと日曜であろうと、留守がちの日が多くなると思うんです。時によれば一週間あるいは一ヶ月あるいは一年間外遊してここに帰って来ないような時があるかもしれない。あるいは途中で死んでしまうかも知れない。

そういうような時代になって参りましたので、皆さんがこちらに見える時には一日か二日前に電話で問い合わせて、それから来てもらった方が間違いないと思うんです。あるいは大倭の土地を踏むだけでもいいという人は、自由にいつ来てもらっても構わないです。

しかし私は霊界の動きと共に行くんですから、いつそうなるかは言えません。そういうようなことも将来ありうるだろうというね、私の想像から話として公開しておるだけです。

「大倭は眠ってる」「こんな行き方をしている宗教は、世界のどこにもありやせん」「もつとしっかりやらにやいかん」とかね、随分今日まで信者から私も尻叩かれてきたんですけども、これからはそういうように大倭もポツポツと変化して行くということだけは、皆さん方に断言できると思うんです。

病気の治療と宗教

しかし過去においてやってきたいろんなこと

は、やっぱり人間の生活の幸せということを考えればね、これからも繰り返す面もあると思うんです。例えば病気でも、皆内緒で裏からコソコソ頼みに来られたりなんかしますけれども、霊障害による病気というのは事実あるんです。仮にそうであれば、治してあげた方がその家庭は幸せになるんだから、そんなことも扱うと思うんです。

ここでひとつ、はき違えてもらっては困るんですがね、病氣と宗教を結び付けて、「治ったから信者になれ」とか「大倭に入ったら、あの人みたいに病氣が治るから信仰せえ」とかいうような感覚において大倭へ人を連れて来るようであれば私は絶対やめませう。

これは、個人の霊的能力において浄化し除霊し、病氣を処置していく霊能治療とか心靈療法とかいうような部門であって、大倭の宗教の中にはもちろん含まれますけれども、人間の肉体で言うたら、足の先ほどの問題なんです。このあいだの『大倭新聞』の「千一夜」の中にもちよいと書いておきました。

そういうようなものを動機として、まともな信仰に入ってくるということはいいんです。それは結構だけれども、それと宗教とを結び付けると邪教・邪道になってしまつて霊界の方から大目玉喰らいますのでね、その点だけ皆さん方よく了解してほしい。

今後、大倭はそうした動きに切り替わっていくとしても、結論は世界の平和という目的になるんですから、皆さん方もまた気持ちを切り替えて出来るだけ自分たち各々のお役目や立場を通して協力して、共にその線に向かって歩調をそろえて歩んでほしいということをお願いするんです。終わります。

「神通力如是」の真意をさぐる 第三回 大倭教の源流にさかのぼって

「神通力如是」において倭姫は終始狂言回しのような重要な役割りを演じている。前回、第二回目の倭姫の登場の場面に続き、今回は倭姫が奇稲田日女命に対して礼を尽くして挨拶する様子が克明に描かれている。(三人の会)

原文

十一月七日、朝七時、於鳥見庄山

神楽手舞を終って拍手を打ち、再び手舞を始め、「アーアーアー」と音波を発す。終てから、

「ワレコソハ、ヤーマートーヒーマー、ナム、ミヤウーホーレン、ゲキヤウ、

、、、、」両手をつき礼をなす。

「ワレコソハ、崇神、ムスメ、ヤーマー

トーヒーマー(倭姫) オーヤマトトビノ

モリ(大倭鷄杜) 奇稲田姫命、アリガタ

クオン礼申シ上ゲマス。(頭ヲ下ゲ)

ヒサシキアイダノワガ思ヒ、カナウ今日

ノヒ、アーウレシヤナーオンレイ申シ上ゲマス、ナム、ミヤウ、ホウレンゲキヤウ、タタタ」拍手と共に題目を唱ふ。節をつけて、
「アーアーアー ナム、ミヤウホーレンゲキヤウ」

「オーヤーマートーアキツーシマネーノ^⑤ 大 倭 秋津 鳥根
アーウミヨ^⑥ ヲ、イークチヨマデモ^{大 御 代}ー
コトホギテースメラミオヤノ^⑦ 皇 祖
」節をつけて唱題、拍手、手舞、(神楽) 両手をつき、
「フツツカナルワザ、ミマエケガシマ^⑧
イラセ、オンレイリタテマツリマス(礼)
ナニトゾオユルシクダサレ、オイトマチ
ヨダイイタシマス」合掌、唱題。

註 釈

①崇神、ムスメ……(後略)…… 平成26年8月

号の『おおやまと』紙に掲載されている「大倭神宮伝承の紀 後編」の中には(4頁中段)法主御自身の記述として「……(前略)……ところが活目入彦五十狭芽命こと第11代垂仁天皇が即位されると、その25年3月神憑かりである皇女倭姫命を豊鍬入姫命にかわって奉祀させられた」の一文もあり、ここでは倭姫は垂仁天皇の皇女とされている。

②大倭 法主によれば、ヤマトは親元(故郷)のなまったもので親元の親元が大親元(大故郷)を意味し、人間だけでなく森羅万象すべての親元である宇宙創成の根本神霊を意味すると語られている。

またヤマトのヤは陽、マトは陰を表し、陰陽一体・相対即一体の理を表すとも言われている。



上の写真は、東方の碑最上部に彫られた図である。稲穂の上にヤ(矢)とマト(的)が描かれており「ヤマト」を表している。ヤ(矢)は陽を、マト(的)は陰を意味している。絵図全体が大きい丸い輪の中にあるのは、和の心を表している。

③鷄杜 現在の倭神宮のある場所を指す。この地では、奇稲田日女命、建速須佐緒命、奇玉饒速日命の三柱の命を「大倭 大國魂大神」として日本民族の元初祖霊と崇めている。

ここは奇稲田日女命の御終焉の霊地であり、建速須佐緒命の因縁の霊地である。このお二人の命を親として御降誕された奇玉饒速日(またの名を大國主命、天照國照彦火明命、大物主命、及び天火明命)の聖地でもあると「大倭神宮伝承の紀」には記されている。奇玉饒速日命を初代とする古代大倭のスメラミコト(大王・天皇)であった代々の長曾根日子命のまつりごとの地でもあったところであり、霊威は強い。

④ヒサシキアイダノワガ思ヒ 「神通力如是」第一回の法主前文の中に「輪孺香は……(中略)……日聖の裏となる」とあるが、この裏の使命こそ妙月の身をかりて現界に名告って出てこ

れた倭姫の新しい使命の始まりであり、ここではその使命を得た喜びの心が表されている。

⑤大倭秋津島根 秋津島(蜻蛉洲)は日本国の異称

「秋津」はもと奈良・御所市室付近の地名と考えられ、そこに孝安天皇の「室の秋津島宮」があつたがその「秋津島」が大和の国、さらに日本全体の称として用いられるようになったものと考えられる。『古語大辞典』小学館) また、日本の国土の形を蜻蛉に見立ててこう呼んだという記録もある。

「大倭秋津島根」全体で日本の国土のことを指す美称であるといえる。

⑥大御代

・大御……神や天皇またはそれに関する事物に冠して尊敬の意を添えるものとして使われる語句である。『古語大辞典』小学館)

・代……世のこと。原文にある大御代とは注釈の②③にある大倭の代々のスメラミコトの世のこと。

「スメラミコト」に関しては本紙『とおやまと』令和元年6月号1・2頁を参照して下さい。

⑦皇祖

・皇……神や天皇に関係ある名詞に冠して最高ものを賛美する接頭語である。『角川古語大辞典』角川書店)

・皇祖……天皇の祖先にたいする敬称であるが、「神通力如是」では奇稲田姫命に冠する言葉として使用される。

⑧フツツカナルワザ……(後略)……

倭姫が奇稲田姫に仕える立場であることが、この謙った言葉使いによって窺われる。後に出てくるのだが、実は倭姫の前の世が奇稲田姫であつたという霊界の複雑にして不可思議な因果関係が、先に進むにしたがつて明らかになってくる。この

ような因縁を解いていくことが「神通力如是」全体を貫くテーマの一つになっている。

また、ここでは妙月に二人の霊界人が憑依して独り芝居のようになっている。

この様に霊媒(神がかり)には同時に、交互に幾つもの霊がかかり、各々の特性(人、動物霊その他。また男女、年齢、固有の想念等々)を表すものでもある。

特集 頭幽不二あれこれ(続)

人それぞれの「味の世界」

逆りつて学べたこと

あじさい色 中島 充世

私は大倭に嫁いで三十三年になります。子どもたちが小さい頃は体調が悪くなることが時々あり、大倭育ちの主人(※中島康治さん)からは霊的なことがあると思うとよく言われましたが、自身はそれにずっと反発を続けてきました。

ある年の東光大祭の日に、東方の碑の所で遊んでいた次女が足を骨折しました。その時初めて霊界というものがあることを実感させられました。そしてその時、霊界の法主様から言われたことは、「今は勉強の時期である」とのことでした。

その後も色々なことがありましたが、その度にお膳をつくりお供えをしました。主人が「おれの食事より良いものを作って供えている」と言ったこともありました。子どもたちも何のことかわからないままにも、その姿を見て育ちました。

長女が中学生の頃には、学校の授業中に人間で

はない者から声をかけられるというようなこともありました。こんな生活の中で私たち家族にとって霊界はとても身近に感じられるものとなりました。

平成十五年十月二十日、主人が突然の事故で他界しました。娘三人と私、残された家族にとつて本当に大きな悲しみでしたが、霊界が身近なものになっていくことで、主人は遠い世界に行ってしまったのではなく、いつもそばにいてくれているという感覚を持つことができました。

今思うと、あの勉強の時間を与えて頂いていなかったら、私たち家族はもっと悲しみのどん底に落ちていたと思います。

法主様、本当にありがとうございます。

こだまこだま

小さなことから始めよう

岡山県真庭市 湯浅 芳郎

岡山県北では早くも稲刈です。「籾田」は稲刈の後の株に新しく出てきた稲茎の田圃をいいます。農業もなかなか後継者がなく放置田が多く見られる。小生、米作りを5反ばかり頑張っている。

日本は豊葦原の瑞穂の国、延々と共同体としての稲作りの文化の中で生きてきたのだ。だから子供の教育は農業体験にまざるものはない。皆で汗を流して育てたご飯を食べて生き物の命をいただいて自分たちは生かされていることを身をもって学ぶことは大切なことだ。最近、新聞紙上、連日困った状況の報道がなされている。隣の人と仲良くする。食べ物を残さない。コツコツと社会の根元からやり直すことしかない。人間 齢を重ねると心で生きるようになりたいものです。

籾田や農継ぐ人の定まらず 芳郎

寸 莎

第138回

且田 英行さん



健康でコロリと

今回の記事を書くために、且田英行さんが夫人の容子さんと暮らす名張市つつじが丘にあるご自宅を訪ねた。お宅は市街地を見晴らす高台の住宅地の一角にあり、五月初旬の明るい日差しの中で新緑が眩しかった。且田さんは同席してくれた容子さんと共に、これまでの人生についてオープンに語ってくれた。

且田さんは昭和14年2月26日に大阪市の上本町で4人兄弟の長男として誕生した。昭和11年の二・二六事件から丁度3年後のことである。

戦況が厳しくなってきた、5歳の時に父親の実家がある和歌山県の海南市に移り住み、国民小学校1年生で終戦を迎えた。終戦前には、「和歌山空襲の際、紀伊水道からB29が侵入してきて、ワンワンと警報が喧しかった」のを鮮明に覚えている。

戦後は、「小学校から帰ると、家の近くの海岸で素潜りで魚を獲った」というから自然の中でのびのびと育ったことが想像できる。それと同時に、「性格に几帳面なところがあり、教科では数学が好きだった」とのことで、子供時代にすでに現在の折目正しくきちんとしたお人柄の基本が築かれていたようである。

中学終了後、和歌山県立工業高等学校電気科に進学し、卒業後は関西電力に就職した。独身寮に入り、「大阪発電所」に配属され、交代勤務で昼夜を問わずに働いた。「火力発電所の仕事は緊張感もあったが楽しかった」という。且田さんの性格に合った仕事だったようだ。

且田さんは趣味の分野でも才能と集中力を発揮する。18歳からはじめた社交ダンスはすぐに腕を上げ、後プロとして教える立場にまでなっ

ている。その後、登山にも夢中になり、スキーにも手を広げ、ライセンスを取得したりしている。「何事にも徹底癖があり凝り性なんです」と容子夫人が笑いながらつけ加えてくれた。趣味はそれにとどまらず、転勤先の多奈川や日高川での魚釣りや、退職後には地元でのコーラスグループへの参加やゴルフにも熱中しているという多彩さである。

さて容子夫人との出会いであるが、大阪の住之江の独身寮で暮らしていた時のことである。当時、夫人のご両親の森下新蔵・糸夫妻は南海電車の住之江駅前で「むつみ」といううどん屋を開いていた。且田さんはその店の常連客で、容子さんは高校生の時から「真面目そうな人」という印象を抱いていた。その後、「むつみ」の隣で容子さんが喫茶「an」を開店した時にも、且田さんは常連客となり、交際を申し込んだのだという。

森下夫妻は法主様の熱烈なファンで、当時教団活動をしていた法主様は、「むつみ」の2階で月1回ほど会合を開いていた。且田さんはその席で法主様に出会っており、「近よりがたいすごい人」と感じたという。後に森下新蔵さんは糸さんと共に紫陽花邑に移り住み、「すさのお会」(大倭会の前身)の会長を務めている。容子さんは父親の志を受け継ぎ、

大倭の福祉施設などを支援する「あじさいの箱」を仲間と一緒に立ち上げ、代表として活躍している。

且田さんも宗教法人大倭大本宮の評議員と監事を長年務められ、大倭に貢献していただいている。

昭和42年の結婚後は夫婦で頻繁に大倭に通うようになり、「禊会などで法主さんの持つ力を体感した」といい、「話される内容には、初めから違和感なく、芯が通っていてぶれない方」と感じていたとのこと。

結婚の翌年に長女の綾子さん、3年後に長男の大輔さんが誕生。綾子さんは米国の大学に留学してサイコロジ(心理学)を専攻し、大学で知り合ったアメリカ人のご主人と結婚してスクールカウンセラーとして働いている。且田さん夫妻はもう10回以上も長期滞在で米国を訪れた。且田さんは定年2年前に関連会社の「日本アーム」に出向し、その後同社の社員として勤務し、63歳で退職された。

現在80歳、毎朝名張駅前のフィットネスクラブで汗を流し、コーラスグループの練習やゴルフを楽しむ健康的な日常である。これからの目標を聞くと、「二人で元気に暮らして、コロリと向こうの世界に帰りたい」と明るく笑顔で語ってくれた。(聞き手 岸田哲)

あじさい日誌

8月13日 中島充世さん宅が邑内の別の場所に引越し。8月15日 台風10号接近中。大倭神宮で午前10時より大倭教立教開宣記念祭。11時30分より東方碑前で挨拶。12時より拝殿で平成4年の東光大祭法話の映像が流される間、瑞光院書齋で祖靈祭。祖霊祭の後、東光大祭の祭典が行われました。平日で、台風で来られない方もいた中、大勢の参拝者。滞りなく終わる

交流の家コンサート

フォーク歌手・中川五郎のスペシャルライブ&トーク

～大きな世界を変えるのは 一人の小さな動きから～

出演時間 14:30～16:00

10月22日(火・祝) 開場 12:30 / 開演 13:00

協力金 1,000円 予約 090-1229-2040 (戸張)

その他ゲスト KEY(在日コリアン青年連合) サムルノリ / 佐渡娑智子(朗読) / 加納さちあ(ソーラーキッチン・ライブ)

第344回大倭会文化行事

～高速道路利用でぐるっと紀伊半島一周バス旅行、神武軍と戦った丹敷戸畔の慰霊を中心として～

日にち 令和元年10月27日(日)～28日(月)

行く先 南紀方面

集合 藤ノ木台1丁目ロータリー 午前8時15分

行程 【1日目】奈良⇒(西名阪伊勢自動車道等)⇒鬼ヶ城

(昼食)⇒花の窟神社・おな神の森⇒泊

【2日目】南紀熊野ジオパークセンター(7月オープン)⇒新装の南方熊楠記念館ミュージアム⇒とれとれ市場(昼食)⇒奈良17時頃

宿泊 太地温泉 花いろどりの宿「花遊」

費用 3万4千円(申込) 溝口富士男 Tel:080-3101-1639

問合せ 林修三 080-2527-0840 / 岸田哲 090-1679-1453

頃、雨が降り出しました。8月20日 川村由佳さん(千葉県我孫子市)が来邑。大倭会館に一泊されました。8月22日 3週間余り昇ちゃんハウスで過ごした高橋良美さんが故郷の福島に向けて出発。8月23日 大倭大本宮月次祭。この日の法話は昭和40年8月23日のCDでした(本紙今月号に掲載分)。8月28日 石垣雅設・清水夫妻と共に、黒柳みつ子(静岡県袋井市)・山端啓子(同田方郡)さんが来邑。杉本さんが応接。

9月3日 夕方、激しい雷雨。9月4日 拜殿のエレベーターが故障? 修理を依頼したがプレーカーが落ちていただけでした。邑内でもプレーカーが落ちた。9月6日 大倭神宮月次祭。停電した家があったそうです。9月8日 大倭会館で邑倭の会。9月9日 野草社の、山尾三省詩集(新版)等の編集者、浅野卓夫さん(東京都)とデザイナーの納谷衣美さん(大阪府高槻市)が来邑。岸田哲・岸野春子・松本トモさんが応接。

大倭安宿苑では8月24日 地域交流で菅野台夏祭に運動場を開放。職員もお手伝いし、市長も来られました。(菅原園)8月18日 恒例の流し素麺。(須加宮寮)8月29日 運動会。(長曾根寮)8月15日(特養)誕生会。8月29日(デイ)夏祭り。(茂毛路園)8月27日 「ピアノでうたおう」(八重垣園)卓球クラブを始めて盛況。

あんない

*月次祭(大倭神宮) 10月6日(日) 午後2時より大倭神宮にて。*大倭会主催第609回祝会 10月13日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。*月次祭(大倭神宮) 10月15日(火) 午後2時より大倭神宮にて。*月次祭(大倭大本宮) 10月23日(水) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

令和元年度大倭会文化講演会

中国医学、統合医学と医療の世界を旅して～中国医学や気功の第一人者からお話を聞く

日時 令和元年11月17日(日) 午後2時～

場所 大倭拝殿 入場無料

講師 うぬまひろき 鵜沼宏樹氏



プロフィール:

◇1962年、鳥取生れ。中国北京中医学学院(現・北京中医薬大学)に留学、卒業後も研究室に勤務。日本で鍼灸・指圧師の資格取得後、再び留学し中医学の研鑽を積む。

帰国後、帯津三敬病院で治療にあたり、現在「統合鍼灸治療元氣院」院長として活躍中。著書『医療気功』『症状を楽にする簡単気功レシピ』他。